

平成州紙



おりおりの記

メイ首相のBrexitとアイルランドの将来

公益財団法人 国際金融情報センター
前理事長

大場 智満

ロンドンを本拠に活躍している金融機関や企業は、Brexitのあとフランクフルト、パリ、アムステルダムの何れに拠点を置くか考え始めている。

参考になるのは、EU主要国の国民性を描いた絵葉書である。ドイツ人のように「ユーモアを解し」、フランス人のように「謙虚で」、オランダ人のように「気前よく」と書かれている。なお、Brexitの英国人は「グルメで」、また大酒飲みのアイルランド人は「いつも素面（しらふ）」と書かれている。

本稿のテーマ、英国とアイルランドについては、福沢諭吉の開口笑話に取り上げられているジョークが面白い。「アイルランドのトラブルは英国にとって気の休まるものである。君は『きつい靴』を履いたことがあるか。きつい靴を履いた時は、足の痛さでほかの苦痛を忘れられる。アイルランド問題は英国にとってきつい靴である。」

6月8日の英国の総選挙で、メイ首相の保守党は630議席のうち318議席しかとれなかった。失意のメイ首相は、10議席をとった北アイルランドの民主統一党との閣外協力で諸懸案に対応せざるをえなくなるらしい。

英国政治で重きをなしている北アイルランドは、Brexit交渉でEU委員会にも重視されている。EU27か国の首脳からなる欧州理事会の「離脱交

渉の優先事項」

3項目に北アイルランドとアイルランド共和国のハードボダー化の回避が含まれている。現在、英国民とアイルランド共和

国民はパスポートチェックや税関検査を受けることなく国境を移動できる。国境管理が厳しくなれば、アイルランド情勢が不安定化することを恐れているのであろう。

因みに、他の2項目は、英国にいる320万人のEU市民の権利を保障すること、そして未払いのEU加盟国分担金などの支払いである。

英国がEUから離脱したあと北アイルランドはどうするのか。これまで通り北アイルランドとしてアイルランド共和国と自由に往来する道をとるか、それとも共和国との統合を求めて英国からの独立を図るのか。

いずれにせよ、北アイルランドは英国に苦痛を与えないよう「しらふ」になって熟慮しなければならないのではないか。

